

校長通信

Morifun

第2期考査が終わり、今年度もいよいよ後半戦へ。お盆が過ぎても猛暑が続いていましたが、さすがに秋らしい季節になってきました。総合型選抜入試が始まり、来月には例年より1か月遅れの就職戦線もスタートします。またスポーツも各競技で新人戦が行われるなど、コロナ禍の中でも、それぞれが工夫をしながら感染症対策をしながら、止まっていた日常が動き出しています。「〇〇の秋」と言われるように、勉強にもスポーツにも最適の季節を迎えています。各自がそれぞれの目標に向かって最善を尽くすことを祈っています。

<全校礼拝より>

新約聖書 マタイによる福音書 5章13節~16節

「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によって塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。また、ともし火をともして柀の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家のなかのものすべてを照らすのである。そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。」

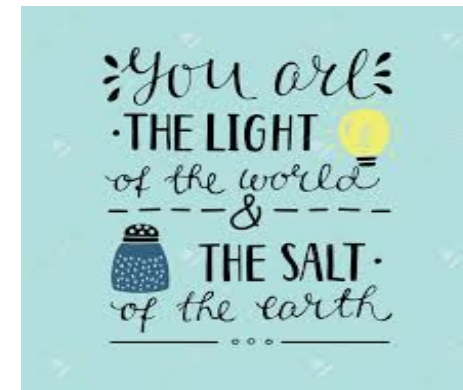
これは「あなたがたは地の塩であり、世の光である」とイエス・キリストが語っているものです。塩というのは不思議な表現ですが、私たちの生活のなかではまず料理に欠かせないものであるわけですが、聖書が書かれた当時は、もっと生活にはなくてはならないもの、味付けだけではなく保存料としても使われていた。つまり「あなたがたは地の塩である」というのは、あなたがたもこの世界ではなくてはならないもの、というメッセージが込められています。あなたの代わりになるものはいないのだ、という私たちをととも励ましてくれる言葉なのです。「塩に塩気がなくなれば」というのは、本来私たちに与えられている個性とか持ち味とか、自分にしかできないものを、失くしてしまう、見失ってしまうという状態を指しています。

日本の社会は「同調圧力」が強い社会だといわれています。つまり「みんな同じでなければいけない」という力が強いということで、今、新型コロナウイルス感染の拡大のなかで、この同調圧力が非常に強くなっています。だからこそ、それぞれが違った持ち味を出していくことが、今私たちに求められている大切なことなのです。もう一つ「世の光である」というのは、一人ひとりが誰かを何かを照らす大切な役割を担っているという前向きなメッセージです。「ともし火をともして柀の下に置く者はいない」とあるように、せっかく灯した灯りをわざわざ目立たない所に隠したりはしない、皆さんが持っている光を、照らすところにしっかり掲げてほしいということです。

最後に注目してほしいのは、この「地の塩、世の光」というのが、将来的にそうなりますようにとか、未来にそうなるようにというのではなく、「あなたがたは地の塩であり、世の光である」ことを現在形で語られていること。努力していつかそうなるのではなく、今そうなのだ、だからあなたの自分にしかできないことを、自分の光をしっかりと輝かせてほしい、そういうメッセージなのです。高校生活の3年間は、自分の好きなもの、打ち込めるこ

とを見つめる時期でもあり、3年生の皆さんはいよいよ本格的に自分の進む道を考えている時期です。新型コロナのこととか自然災害のこととかが私たちの目の前にありますが、皆さんがやりたいこと大切にしたいこと、夢に向かって力強く歩き続けていけるよう祈っています。

(9月1日 全校礼拝・花巻教会牧師・鈴木道也先生)



新約聖書 マタイによる福音書 7章1-5節

「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって、『あなたの目からおが屑を取らせてください』と、どうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まずは自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」

この「人を裁いてはならない」というイエス・キリストの言葉に、《あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか》という面白い表現があります。私たちは他人の目にある《おが屑》、つまり人の小さな過ちや欠点はよく見えるのに、自分の目の中にある《丸太》、つまり大きな過ちには気づかない、ということです。「人を裁く」とはどういうことか、ここでは、自分の一方的なものをさしによって人を判

断してしまうということです。「あの人はこうだ」「この人はああだ」とか、一方的に決めつけてしまうこと。本当は相手のことをよく知らないのに、「あの人はこういう人だ」と決めつけて批判することがよくあります。本当は相手のことがよく見えていないのに、勝手に「こうだ」と決めつけてしまっている状態を、「目に丸太が入っている状態」とユーモアをもって表現しています。

ある本では、「人を裁く」とは、『あなたはこうだ、ああだ』と、人の人格にレッテルを貼ること』だと説明しています。最近では社会全体において、相手に一方的なレッテルを貼る傾向がより強まっています。よく相手のことを知らないのに、誰かから聞いた話や、ネットで得た知識などをそのまま鵜呑みにして、相手を判断していることが多く起こっているのです。レッテルを貼ることがいかに問題であるかは、自分にレッテルが貼られた場合を考えるとよく分かります。「あの人はああだから」と自分が一方的なレッテルを貼られたとしたら、私たちはとても辛い気持ちになります。そして、このようなレッテル貼りがエスカレートしてゆくと、遂には、「あの人は価値が劣る人」「あの人はいなくてもいい人」と、相手の人格や存在を否定する言動にまで至ってしまいます。

「優生思想」という言葉があります。自分の勝手なものさしで、人を一方的に「優れた人」と「劣った人」に分け、「劣った人」は「いなくてもいい」とみなす思想です。この言葉が改めて知られるようになったきっかけは、2016年の7月に起こったやまゆり園事件でした。重度の障がいをもった方々が生活する神奈川の施設で19の方が殺害され、27の方が負傷するという大変痛ましい事件が起きました。この事件においてはその残虐性とともに、犯人の青年の「障害者はいないほうがいい」という言葉が社会に大きな衝撃を与えました。犯行に及んだ青年は、重い障がいをもつ人々は生きる価値がないとの信念に基づいて犯行に及んだと言われています。この事件をきっかけにして、私たちの社会で改めて、優生思想という言葉が取り上げられるようになりました。優生

思想は非常に恐ろしい考え方であり、決して容認することができない思想です。一方で、優生思想のように極端なものにならなくても、他者を自分より低く見てしまう想いは、誰しもが抱いたことがあるのではないのでしょうか。私たちは、もしかしたら優生思想になり得る小さな芽のようなもの——「あの人はいなくてもいい」「いないほうがいい」と勝手に判断してしまう想い——を心のどこかに抱えながら生きているかもしれません。その意味でも、私たちは時に立ち止まって、自分の心の中をよくよく見つめてゆく必要があるのではないのでしょうか。

聖書が私たちに伝えてくれていること、それは、神さまの目から見て、一人ひとりの存在がかけがえなく貴重なものである、ということです。神さまのまなざしの下では、優れた人も劣った人もありません。一人ひとりが大切な存在であるのです。

(9月8日 全校礼拝・花巻教会牧師・鈴木道也先生)

<部活動の活躍から>

【柔道部】県高校1、2年体重別選手権 (8/29)

1年 60kg級①石綿温人 66kg級③勝田隆暖 73kg級①外浦風汰③栄真智 81kg級①佐々木康太③山田雄晟 90kg級①佐藤真将 100kg級②菊地悠希
2年 60kg級①安部将 90kg級①土屋琉空 100kg級①杉山治樹

【陸上部】県高校新人大会 (9/11～13)

3000m障害①若林夢希④松浦海翔 5000m①大宮大虎
(上記3名に5000m佐々木稼全が東北大会へ)

【野球部】秋季高校野球大会 (9/18～27)

1回戦7-0 (七回コ) 大東 2回戦7-0 (七回コ) 水沢商 準々決勝7-1 専大北上 準決勝7-2 花巻東 決勝5-2 関学院 ※3年連続12回目の優勝

<戦争について考える>

今年は戦後75年の節目の年、戦禍を生き延びた人々は高齢化し、あの時のことを知る人は減ってきています。健康への不安、薄れる記憶。しかし平和への思いを若い世代へ託そうと、発信を続ける人もいます。直接話を聞くことができなくとも、メディアのみならず読書や映像を通して知ることもできます。

私は最近、「小さいうち」(中島京子)を読みました。第143回直木賞を受賞したこの小説は2014年に映画化もされました。元女中の女性が、自身の回想録を元に、かつて奉公していた「赤い三角屋根の小さいうち」に住んでいたある一家のことを顧みながら、ある「密やかな恋愛」について回顧する物語。昭和11年から次第に戦況が悪化していく中、東京の中流家庭の生活が描かれています。決して大げさには描かれていませんが、忍び寄る戦争の足音が不気味です。それから大林宣彦監督の遺作となった映画「海辺の映画館～キネマの宝箱」を観ました。海辺の映画館の観客である現代の若者3人が、映画と戦争の歴史の中にさ迷い込み、いろんな時代や空気の中で、様々な体験を重ね、人として成長していくというストーリー。前半はいわゆる大林ワールドになかなかついていけません、しかし中盤からは画面にのめり込み、特に後半の移動演劇隊“桜隊”(岩手県出身の園井恵子も勿論登場します)が登場する原爆投下前夜の広島からもう涙が止まりません。過去は変えられないが未来は変えられる。平和を願ってこの作品を作りましたとピアノを弾きながら語る監督の言葉で、映画は終わります(実はここにも仕掛けがあります)。癌に侵され命がけで作った監督の冥福を祈ると共に、戦争を知る人からのバトンを確実に受け取る覚悟も新たにしたところです。

今月の言葉

「恋人を自ら選ぶ心で、平和を手繰り寄せなさい」(「海辺の映画館～キネマの宝箱」より)